

寺川の橋



まごめは、むかし、中山道といって、旅人がたくさん通った。また、島崎藤村の生れたところで、いまは、藤村記念館がある。

まごめのバス停から少し、石や坂を登ると永昌寺があり、そこには、島崎藤村のお墓もある。

その永昌寺へ行く道を、寺道という。川があつて、橋を渡らないと、お寺へは行けない。いまは、コンクリートの道になっているが、むかしは、寺川に丸木橋が かかっていたそうだ。

そして、雨が降るたびに 流れてしまうので、お寺参りの人や、百姓の人は大へん困っていた。

その川に、一晩のうちに、石の橋が出来てしまつて村の人たちは、びっくりしたという、おもしろい話が残っている。

むかし、まごめ村に、鬼助と彦七という力の強い男の人が住んでいた。

毎日、力じまんをしては、村の人に、いばつて話をしていた。

ある日、彦七が

「おい、おい、鬼助、きょうも力くらべをすることはないかい。うでがなるぞ。と、鬼助の家へ、遊びに来た。」

二人は、うでぐみして、しばらく考えこんでいた。

すると鬼助が、

「しめた、良いことを、思いついたぞ。」

と、立ち上つた。そして前を指さして

「あの寺川に、石の橋をかけまいか。」

「どうだ彦七、村の人は、雨が降るたびに、橋が流れて困つておる。おれたち

の力で、雨が降つても流れん石の橋をかけまいか。」

「それは、いいことだ鬼助、早くべんとうを作るぞ。」

と彦七は、べんとうを作つた。

二人は、さっそく、べんとうを持って、石さがしに出かけた。
あっち、こっちと、さがし歩いたが、橋になるような大きな平な石は、見つからない。とうとう、お昼に なってしまった。

彦七が、

「ああ、くたびれた、はらへった、いっぷくするか。」
と、いって、二人はべんとうを食べた。

しばらくして、鬼助が、

「こんどは、大戸の方へ、行ってみるかい。」
と いって、また、石さがしをはじめた。

大戸…… ぼんでん山のむこう、石のやじりが出る。
大戸へ行ってみると、石が、いっぱいあった。

二人は、どれにしようかと、まよってしまった。

鬼助が、

「おい、彦七、おまえ、この 大きな石をしょえ。」
と、大きな石を しょわせた。そして、自分は、それより少し 小さな石を、



かついだ。

そして、また、鬼助が、

「おい、彦七、どんね、えらくとも、えらいの『え』と、いったらまけだぞ。」と、いった。

彦七は、まけてなるものかと、だまって歩きはじめた。

はじめは、かるそうにかついだ彦七も、だんだんと苦しくなってきた。お寺の坂道へ来た時は「はあ、はあ」と、苦しくなると、体からは、玉の汗がボタ、ボタと落ちて来た。

彦七が

「おい、鬼助、足がふわふわして来たぞ。」
と、いった。

今度は、鬼助が

「おい、彦七、なんだか、向こうが、かすんで見えるよ。」
と、いった。

でも、二人は「えらい。」といわずに、だまって歩いた。

どつちも負けたくないの、夕日が沈みかけたころ、二人はよろよろしながら、寺川まで、石を運んで来た。

それから、二人は、力をあわせて寺川に石を渡して橋を作った。

村の人は、朝になって、丸木橋が石の橋に変わっているの、びっくりした。月日が、たっても、くずれない立派な橋が出来て、村の人は、毎日、安心して通れる橋が出来たので、鬼助と彦七に感謝したという。

文・鈴木 佐代子

絵・藤原 梵

かん助の松



神坂の湯舟沢に、細野というところがある。細野は、むかし、東山道が通っていた。

細野に、高野山というところがあり、お城があった。

城の近くに、それは、大きな枝ぶりのいい松が、一本あって、その松に登ると、湯舟沢や、神坂峠の方まで 見渡すことが出来る、見はりの松があった。

その見張りの大しように、かん助という人がいた。

いつも、けらいを二、三人 つれて、見はり番をしていた。

かん助は、松の木にのぼって、

「やあ、これはよう見えるわい。」

と、毎日、神坂峠の方を 眺めていばっていた。

けらいは、松の木の下にいたので、何も見えない。



「おい、かん助、てめいだけ いい気になって いばっておらず、おれにも見せるよ。」

と、下から見あげていった。

しかし、かん助は、

「おれは、見はりの大しようだ、おれだけのぼっていれば、いいのじゃ。」

「てめいらは役にたたんわい。」

と、木の上で、いばっていた。

ある日、あまり かん助がいばるので、けらいたちがそうだんして、かん助が 松へのぼれないように、枝を切ってしまうことにした。

夕方、かん助が、一日の見はりをおわって、

「おれが、見はれば、敵もこぬわい、見はりかん助、命の松よ、立派なかさ松

細野のやねよ。」

と、はなうたを歌いながら、帰っていった。

かん助がいなくなるのを待っていたけらいたちは、

「それ、枝切りに、かかれ。」

と、大きな おのをふり上げて、松に切りかかった。

ところが、どうしたことが、おのがくすがない。

「おかしいぞ、もう一度、力いっばい、ふりおろせ。」

と、いって、それと、切りつけた。

すると、「ド……………」と大きな音がして、切口から、赤い汁が ふき出

てきた。びっくりしたけらいたちは、その場に たおれてしまった。そして、

真青になって、にげ帰った。

そんなことがあつてから、細野部落の人たちは、かん助の松を切ると、音が出るとか、血をふくとか 言つて、だれ一人として 松を切る人はいなかった。

ところが、明治四十年ごろの台風で、かん助の松の枝がおれて、みにくい かつこうになってしまった。

そこで細野部落の人が、全員集つて そうだんしたが、だれも切りに行く人はいなかった。となり村のすえ吉という人がその話を聞いて、

「よし、おれが、ひとつ切つてやろう。」

と出かけて来た。

細野の人たちはみんなで、

「やめてくれ、おそろしい。」

「たたりがあるぞ。」

と、いつて、心配そうにしていた。しかし、すえ吉は、

「なあに、たたりなんかあるものか。」

と、みんなの心配をあとに、一人で、かん助の松を切りに出かけていった。

行ってみるとさすがのすえ吉も、しばらく 眺めていて、

「こりゃあ、りっぱな松だ、切るのはもったいないわい。」

といった。でも切つてやると、いばつて出かけて来たので、意を決して、枝に

おのをふりおろした。

すると、すえ吉は、急に苦しくなつて、手足をばた、ばたさせて たおれて

しまった。この様子を遠くから見ていた細野部落の人は、びっくりして飛んで

来て、

「やめれ、やめれ。」

といったが、すえ吉は、少したつと 立ち上つて、二度めのおのを、かん助の

松へ、「えい。」と力いっぱい 切りつけた。

すると、かん助の松は、「ド……………」と大きな音を出した。

そして、切り口から、血をふいた。

細野部落の人や、すえ吉は、びっくりして にげ帰った。

すえ吉は、やつとのことで 家へたどりついたが、とう、とう熱を出して、

ねこんでしまった。

それから、細野部落の人は、だれ一人として、松を切るという人は いな

かった。

その松も、昭和三十四年の伊勢湾台風で たおれてしまい、いまは、かぶが

残っている。

文・鈴木 佐代子

絵・加藤 公雄

おおいけぬし

大池の主

まごめの一番上の方に、あたご山というところがあった。

そこに、池が二つあった。一つを、いもり池、もう一つを大池といった。

むかし、天気つづきで、田んぼに水がなくなってしまう時、あら町の人

は、あたご山に集って、百八のたいまつをつけて、大池の主にお祈りをした。

そして、大池の水をかりて来て、氏神様に おそなえして、天のめぐみの雨を待った。

この、あたご山の池は、むかしは、いまの六十倍も大きくて、いつも、水が一ぱいたまっていたいて、気味のわるいところだった。

むかし、そこに、大きな一ぴきのへびが、すんでいた。村の人は、その主に、お椀やお膳をかりることがあった。

ある日、あら町で、ご祝言があった。百姓の家は、むかしはびんぼうでした

から、お膳やお椀がなかったから、大池の主にかりることにしていた。

「お主さま、お主さま、どうかお膳とお椀を三十人前貸しとくれ。」
と言って、手をたたいて おねがいました。

次の朝行ってみると、池の端に、たのんだ分だけちゃんとそろえておいてあった。

村の人は、使ってしまうとお礼のことばをいって、お酒を一合つけて、お返しして来た。

ところが、ある年のこと、村の人が祝言をするとして、三十人前のお膳とお椀をかりた。そうして、いよいよ返す時、一つ、いためたので、こないたんだものを返したらしかられると思って、一つ足りないまま返した。



池の主は、何度かぞえても一つ足りない。ぶんぶんにおこってしまった。

「こんなところには、おらん。」

と言つて大雨を降らせた。そして、池のはしをくずして、流れる水といっしょに、湯舟の方へ立ちさつていった。その時は、田んぼや畑も大へん荒れて、作物は土の下になつてしまった。

そのあとは、何回池の主にたのんでも、さつぱり、膳も椀もかりれんようになつてしまった。

湯舟は、それから雨ごいに行く人が多くなり、坂本や苗木の方からも水をもらいに来た。

文・鈴木 佐代子

絵・大橋 寿美代